

視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ 代表 林建太

① 団体紹介（これまでの障害者文化芸術活動に関する取組等）

■活動実績

- ・2012年6月任意団体 発足 メンバー6名(晴眼者2名、視覚障害者4名)で活動中
- ・毎月1回全国の美術館や学校で鑑賞プログラムを開催
- ・美術館との協働による長期プロジェクトや職員研修など
- ・開催回数 計121回(13都府県38カ所のミュージアム、学校)
- ・合計参加者数 1696名（うち360名全体の約2割が視覚障害者）
- ・毎回、参加者の7割が新規、リピーター3割

主な協働

東京都写真美術館、東京都現代美術館、横浜美術館、東京ステーションギャラリー、長崎県美術館、

川崎市市民ミュージアム、ヨコハマトリエッナーレ、文化庁メディア芸術祭、ビッグアイアートプロジェクト公募展、

女子美術大学、新渡戸文化小学校、群馬大学 群馬県立盲学校など

■鑑賞ワークショップの3つの特徴

- 1 「視覚障害者」「晴眼者」が複数人が一緒に鑑賞する
- 2 視覚障害者スタッフと晴眼者スタッフがコンビでナビゲーターを務める
- 3 見えることと、見えないことを言葉にする

■何を言葉にするのか

- ・見えること 色、形、大きさ、モチーフなど
- ・見えないこと 印象、感想、解釈、思い出したことなど

■どうやって「見る」か

作品についての情報だけでなく

他者の見方や語りを交えて共同で「見る」場である。

■どう関わるか

ここでの視覚障害者と晴眼者の関係は役割の固定化した一方通行の支援関係ではなく

役割が変化する双方向に影響し合う関係

■何が発見されるのか

固定的な関係の中ではニーズと支援が先にすでにある

流動的な関係の中ではニーズや支援は後から発見され、新たな文脈が生まれる

② 障害者の文化芸術活動の推進において必要だと思われる施策について

- ・ 機会の拡大の前に、振り返り、考える場が必要
- ・ 視覚障害者の美術鑑賞の歴史を振り返る
どのようにマジョリティとマイノリティが関わってきたのか

「権利の時代」

1984年 ギャラリーTOM 開館

東京渋谷の触る美術館

「ぼくたち盲人もロダンを見る権利がある」

1993年 名古屋YWCA アートな美

ガイドボランティアによる言葉を使った鑑賞

「モディリアニのおさげ髪の少女がみたい」というある視覚障害者の声から活動が始まった

「経験の時代」

2000年～2013年頃

MAR(Museum Approach and Releasing 通称：マー)

一般の参加者どうしの言葉による鑑賞

市民団体として全国の美術館で30回以上のツアーを開催

webより抜粋「～ガイドする人される人という一方的な関係ではなく、ボランティアという立場でもなく、あくまで一緒に楽しくみる仲間として、」

→双方向の関係

2002年～現在

ミュージアム・アクセス・ビュー

見える人／見えない人がグループになって、言葉で観る美術鑑賞を行なう

市民団体として京都を拠点に関西方面で活動中

何を考える？

晴眼者と視覚障害者が関わることで見えてくる言葉のズレ

「説明とは？」

「バリアとは？」

「鑑賞とは？」

→どれもマジョリティとマイノリティの間で意味がズレやすい言葉

③ 障害者文化芸術活動推進法について思うこと、期待すること（任意）

障害は障害者の内側にだけ存在するのではなく

社会に存在するものだという社会モデルに基づいて考えるなら

無自覚で語られにくいマジョリティの存在、役割、をこそ自覚的に考えなければ
マイノリティを含んだ社会の仕組みは見えてこない

文化芸術のうち特に視覚芸術の鑑賞支援を考える時には

支援を担う晴眼者こそが視覚芸術がどのように見られ経験されているのかを改めて考える必要がある